

# Shoun

2

特集

## 新聞で見る 島根大学のあゆみ

8

しまだい資料探訪①

## 「相坂先生寄贈資料」

田籠 博(附属図書館長)

- 10 | 情報活用ステップアップ講座⑤
- 12 | 図書館員のお仕事  
第98回 全国図書館大会 島根大会  
参加報告
- 14 | 図書館コンシェルジュ報告
- 15 | 書評『絵葉書が語りかけるもの』 出版報告  
職員寄贈図書
- 16 | 研修報告
- 19 | イベント&ニュース







国の所有とすることなどを条件に、島根大学農学部として国立移管が認められました。

## ●全国に医学系大学設置の動き 〈島根医科大学〉開学

**昭**和40年代は全国的な医師不足が問題となっていました。特に島根県は山間部の過疎地や離島を抱える医師過疎県で、地元に着着してくれる医師の育成は緊急の課題でした。加えて全国に八つあった医科大学未設置県のひとつでもありました。大学の誘致運動は全国

的にも激しいものがありました。島根県と出雲市による単科大学の強い誘致運動の結果、昭和48(1973)年12月に出雲市に設置が決まりました。立地条件や、地元の病院との協力体制をアピールできたことが大きな要因でした。

昭和50年10月1日、島根医科大学が開学し、翌年4月に仮校舎で入学式が挙行されました。世界に通用する医師を育成するためのレベルの高い医学教育、地域医療への貢献や難病研究への取り組みなど、特色ある基本構想が示されました。

開学から4年後の昭和54年には附属病院が開院しました。開学当初は未整備であった周辺環境も年々充実し、医療のみならず教育、文化、経済面において、地元活性化の大きな役割を果たしています。

## ●国立大学の再編・統合と法人化

**平**成15(2003)年、研究や運営の合理化、効率化をめざした全国的な動きの中で、国立大学の再編、統合が進められ

明治 8. 4	松江と浜田に島根県小学教員伝習所設立
明治 9.10	松江師範学校、浜田師範学校と改称
明治 11. 9	松江女子師範学校開校 (明治 14.9 廃校)
明治 17. 7	松江師範学校を島根県師範学校と改称
明治 19. 8	制度改正で島根県尋常師範学校と改称
明治 31. 4	制度改正で島根県師範学校と改称
明治 36. 4	島根県女子師範学校開校
大正 7. 5	高等学校設立期成同盟を結成
大正 9.11	松江高等学校設立を公布 (全国で17番目)
大正 11. 5	松江高等学校開校式
昭和 18. 4	島根県師範学校と島根県女子師範学校が統合移管され島根師範学校となる
昭和 18.10	学生の徴兵猶予制度が撤廃され徴兵検査、学徒出陣が始まる
昭和 19. 4	島根青年師範学校開校
昭和 22. 7	山陰大学設立期成同盟会を結成
昭和 23. 8	島根大学として設置認可申請書を提出
昭和 24. 5	国立学校設置法が施行され、島根大学開学
昭和 26. 4	県立島根農科大学開学
昭和 32. 2	島根農科大学国立移管期成同盟会を結成
昭和 40. 4	島根農科大学の国立移管が認められ島根大学農学部となる
昭和 50.10	島根医科大学開学
平成 15.10	島根大学との統合により、島根医科大学が島根大学医学部となる
平成 16. 4	国立大学法人島根大学となる



ました。その中で島根、島根医科大学の両大学も統合することが決まりました。島根大学は昭和53(1978)年6月に文学部を改組して法文学部、理学部(現総合工学部)とし、教育学部、農学部(現生物資源科学部)とあわせて4学部となっていました。統合により医学部を加えた5学部体制となり、新たな島根大学として10月からスタートを切りました。

さらに半年後の平成16(2004)年4月、国立大学設置法を改正し、全国の国

「人とともに 地域とともに」をスローガンとして掲げ、より地元に着着し、社会に貢献できる大学を目指してあゆみが続いています。

### 〈参考文献〉

- 『島根大学史・第1巻』 島根大学 1981
- 『新聞に見る山陰の世相百年』 山陰中央新報社 1983
- 『島根県近代教育史』 島根県 1978
- 『出雲市四十年誌』 出雲市役所 1982

立大学を法人化する大改革が行われました。管理運営が大学の裁量に委ねられた半面、予算削減の中で効率化を進め、要求される成果をあげ続けなければなりません。地方大学にとっては、何よりも職員の意味改革が重要となっています。国立大学法人島根大学は

## 「山陰中央新報社の変遷と地域情報の収集発信者からの新聞資料」

山陰中央新報社

山陰両県で地域に密着した報道を行っている「山陰中央新報」は、平成24年5月1日で創刊130年を迎えた。全国の地方紙の中でも古い歴史を誇る。

山陰中央新報の前身の「山陰新聞」は明治15年5月1日、現在の松江市白潟本町にあった商家を社屋に産声を上げた。島根県内では、それまでにくつかりの新聞が発刊されていたが、山陰新聞はタブロイド判に近い4ページの隔日刊ながら、定時刊行をうたった。

続いて山陰新聞とともに中央新報の前身である「松陽新報」が明治34年11月3日に創刊した。松陽は1部1銭5厘、1カ月



山陰新聞の社屋  
(明治32年2月22日付4,000号記念号から)

25銭。基本4ページで発行していた。

初期の新聞の印刷機械は、最初は手回しで、次に蒸気の動力。輪転機は部数1万部となった松陽が明治44年末に初めて導入。山陰は遅れて大正9年に入れた。両紙とも大正期に夕刊発行を始めた。

明治初期の地元記事は「探訪」と称する者がネタを拾い帰社後に報告、それを編集者が聞いて書いた。全国ニュースの受信は電報から予約電話へと比重が移り、大正になると速記者が重用された。

太平洋戦争勃発の昭和16年12月、言論統制と資源節約を進める国の「1県1紙」方針に従い両紙が合併、17年元日から「島根新聞」に題字が替わった。

新聞統制が強化されるなか、20年4月から9月末まで、各県で全国紙の販売をやめさせ、地方紙に肩代わりさせる持分合同政策が強行された。その結果、全国紙の読者分を上乗せして印刷、「島根新聞」の題字下に「朝日新聞」「毎日新聞」と、当時提携関係にあった「読売新聞」の3紙分の社名が刷り込まれた。さらに20年8月6日広島に原爆が投下され、「中国新聞」との相互援助契約に基づき、8月11日付けから8月末まで代行印刷し、その間全国紙3社と中国新聞が題字下に名を連ねた。今では、考えられない出来事だった。

島根新聞社では戦時中から夕刊を休刊していたが24年10月から「夕刊島根

新聞社」を設立、「夕刊島根」の発行に踏み切った。26年5月に用紙統制が撤廃され、翌年全国紙との競合激化により島根新聞は経営が悪化した。27年4月、社名を「山陰新報社」に変え題号も「山陰新報」とし「夕刊島根新聞社」も吸収。しかし結局は32年10月に「島根新聞」に題号を戻し、35年4月には夕刊を廃刊した。

島根新聞社は、高度経済成長下の39年、宍道湖の干拓地・袖師町に新社屋を建設、新輪転機も設置した。45年4月からは16ページ建てとし、併読紙から主読紙へと方針を転換、地元読者に愛される紙面づくりを目指した。

48年3月、社名を「山陰中央新報社」に、題号も「山陰中央新報」と改称。山陰は1つを標榜、島根県内へ本格進出を果たした。53年6月から松江市東朝日町の新工場でおフセット印刷による連日カラー印刷を開始。明治15年の創刊から続いた鉛活字や輪転機の鉛版がなくなる歴史的な出来事であった。近代的な新聞製作システムに生まれ変わった55年、さらに編集・組み版・校正をコンピュータ処理するシステムを導入。くにびき国体の57年8月には、父祖

者に配備され、現場から瞬時に画像データを本社に送ることが可能となった。紙面レイアウトも、整理記者がパソコン画面上で見出しを付け、写真の配置などキーボードを操作しながら新聞紙面を製作している。

の地松江市殿町に本社を移転、同時に益田市に西部本社を設置し9月1日から現地印刷を開始した。平成8年10月からは斐川町に印刷工場を新設、最新式の輪転機が稼動。カラー紙面の増加や高齢化社会に対応した文字の拡大化を実現した。

現在の取材ネットワークは、島根県内に松江本社をはじめ安来支局、隠岐支局、雲南支局、出雲総局、大田支局、川本支局、江津支局、西部本社(浜田)、益田総局、津和野支局の11カ所、鳥取県内には鳥取総局、米子総局、境港支局の3カ所。都会地には東京、大阪、広島各支社がある。政治・経済・事件・事故をはじめ、医療、暮らし、スポーツなど、さまざまな角度から取材し、地域住民に必要なニュースを提供している。そしてテレビにはない新聞の持つ特長として、関心のある情報を何度でも繰り返し確認ができ、記事をデータ化したり、切り抜きしたりして管理する「保存性」に優れている。「見て確認できる」新聞記事の資料的役割は今後も変わらない。



松陽新報の社屋を引きついで  
島根新聞の殿町社屋 (昭和27年)



### 情報サービスグループ 金子尚登

「新聞」というとみなさんは何を思い浮かべるでしょうか。

図書館では朝日・読売・日経などの全国紙や山陰中央新報などの地方紙、その他分野ごとの新聞や英字新聞などを資料として購読しています。

ただ、新聞紙に印刷されているいわゆる新聞(区別するため「原紙」と呼んだりします)は紙質や形態などにおいて長期間にわたる利用や保存を考慮せずに行われていたため、図書館の資料として管理、運用、保存しつづけるのはなかなか大変です。

そのため新聞は原紙以外に様々な形態を変えて作成されることがあります。ひと月分を冊子として大きさもコンパクトにまとめた「縮刷版」、特殊なフィルムに紙面を印刷し、専用の機械で閲覧する「マイクロフィルム」などがあります。

また、最近では、インターネット上で記事を検索できるデータベースの形態で提供されているものもあります。島根大学では平成24年度は朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞(日経テレコン)、New York Times、USA Todayが契約して利用できるようになっています。附属図書館のWebサイト内の「電子リソース」から「論文・記事」「新聞」とリンクをたどることで、下図のような

#### 島根大学附属図書館Webサイト内の新聞記事データベースへのリンクページ



データベース名	URL	フォーマット
New York Times	http://www.nytimes.com/	HTML
USA Today	http://www.usatoday.com/	HTML
日本経済新聞	http://www.nikkei.com/	HTML
朝日新聞	http://www.asahi.com/	HTML
読売新聞	http://www.yomiuri.co.jp/	HTML

リンクページへいけるようになっていきます。

実際に新聞記事を調べる際に、原紙はもちろんのこと縮刷版やマイクロフィルムでも、自分の読みたい記事が何年何月何日の号に掲載されたのかわかっていないと、見つけるのは非常に手間がかかります。ですが、データベースの形態ですと記事や見出しに含まれていない言葉がわかっていけば、探す手間は遙かに少なくて済みます。また、ある事柄について掲載された記事が存在するかどうか調べるなど、データベースでできないこともあります。

以下各紙のデータベースについてもう少し詳しく説明します。

### 朝日新聞

「間蔵IIビジュアル」という名前で、朝日新聞の記事については1879年(明治12年)の創刊号から今日のものまでの記事を検索して閲覧できるようになっています。

年代によってシステムに若干違いがあり、以下のような特徴があります。

- ◎創刊号から1989年まで
  - ・ 検索の対象は見出しなど
  - ・ 東京本社版(二部大阪版)を収録
  - ・ 記事本文は記事イメージ(PDFファイル)を収録

- ◎1985年から現在まで
  - ・ 記事全文が検索の対象
  - ・ 沖繩を除く全地域面も収録
  - ・ 記事本文は文字データ、記事イメージ(PDFファイル)両方を収録

・ 『アエラ』、『週刊朝日』を一括で検索可能  
 ・ その他『知恵蔵』や人物データベースなども利用可能になっています。  
 ・ なお島根大学の契約では同時に二人しか利用できませんので、ご注意ください。

### 読売新聞

こちらは『ヨミダス歴史館』という名称で創刊号(1874年 明治7年)から現在までが利用可能です。こちらも年代によってシステムに以下のような違いがあります。

- ◎明治・大正・昭和
  - ・ 検索対象は見出しなど
  - ・ 記事本文は紙面イメージ
  - ・ 紙面イメージ内では検索でヒットした語に目印のピンを表示

- ◎平成
  - ・ 記事全文が検索の対象

・ 沖繩を除く全国の地域版を収録(県により収録開始時期に違いあり)  
 ・ 記事本文は文字データと切り抜き紙面イメージを収録  
 ・ ほか『The Daily Yomiuri』や現代人名録も利用可能になっています。  
 ・ なお、注意点としては紙面イメージ表示にはフリーソフトのAdobe Flash Playerのインストールが必要です。また、こちらの契約では同時に利用できるのは一人になっています。

### 日本経済新聞

名称は『日経テレコン21』で現在の契約では日本経済新聞の1976年以降の記事の検索と閲覧が可能です。記事の本文は文字データで1988年の途中からPDFファイルでも収録されています。

ほかに日経産業新聞、日経MJ(流通新聞)等も検索可能なこと、企業情報も検索できるなどの特徴があります。なお、こちらは同時利用人数に制限はありません。

あとの二つはNew York TimesとUSA Todayは海外で発行されている新聞です。New York Timesは1980年以降、USA Todayは1987年以降の記事が検索でき、記事本文は文字データで閲覧することができます。

新聞という日々のニュースを知るだけのもので、思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、過去の記事を見ると当時の社会の状況、それこそ世界情勢から市井の人々の暮らしの様子までうかがい知ることが出来ます。上手に利用してぜひ学習や研究に役立ててください。

(かねこなおと)

# マイクロフィルムの電子化と利用

企画・整備グループ 福山栄作

山陰中央新報の前紙である山陰新聞・松陽新報・島根新聞・山陰新報(明治15年5月〜昭和41年4月)について本学で所蔵するマイクロフィルムを使い、松江市の史料編纂室と島根県立図書館との共同事業として電子化を行ってきました。

また、昨年度マイクロフィルムの状態について調査を行い、古いマイクロフィルムについては状態の良くないものがあることが報告されており、対策を検討しています。

同新聞資料は、山陰両県の歴史資料として重要であり、研究・教育での利用が多い資料で、特に明治〜大正期のものについては、利用によるキズが目立ってきていました。

今回、電子化を行った新聞資料について学内限定ではありますが、デジタル・アーカイブから利用できることとなりました。

デジタル・アーカイブからの利用は、学内端末から同時に複数人で利用できるようになりますが、最近の記事論文データベースとは違い記事索引が無いため年月日から紙面を見ていく必要があります。

以下、デジタル・アーカイブを使った新聞資料の利用方法を紹介します。

## 【デジタル・アーカイブ】

## 【図書館ホームページ】 <http://www.lib.shimane-u.ac.jp>

図書館 HP の「SUL Digital Archive」をクリック

Digital Archive で「大学資料」をクリック

大学資料の「マイクロ資料」をクリック

マイクロ化されている新聞紙名リストが表示されます

## 【画像サーバ】

紙面中の任意の場所をクリックすると拡大されます

拡大表示時にはドラッグすることで表示位置を移動

右の▶をクリックすると次ページが表示されます

該当年月のアイコンをクリックすることで紙面が表示

年月アイコンから画像サーバで表示される紙面画面は、一月もしくは半月単位となっています。一単位のページ数の多いものは、表示までに時間がかかります。レスポンスを向上するためにより小さな単位になるように検討を行なっています。

記事単位でのプリントが必要となる場合には、掲載紙名・年月日・面数及び記事名を複写申込書に記載しカウンターまでお持ちください。

新聞記事の著作権は、一般著作物と少し違っている面があります。

新聞社の記者が書いた記事と一般からの署名記事で著作権法上の扱いが異なる紙面中のどの記事が該当しているかの判断が難しいこともあり、山陰中央新報社との協議により利用制限を行なっています。

利用にあたっては、著作権等に配慮した利用をお願いします。

(ふくやまえいさく)

第11回

しまだい 資料探訪

# 島大



## 「相坂先生寄贈資料」

田籠 博 / 附属図書館長

「抄物」は室町中期〜江戸初期にかけて成立した、漢文をテキストとする講義の聞き書きのことです。講義内容はいうまでもなく忠実に、講師のくだけた講義の口調まで写したもので、室町時代の口頭語（話し言葉）に近いものとして、狂言台本やキリシタン資料とならんで研究資料とされています。

「相坂先生寄贈資料」の抄物はすべて江戸時代に出版された整版本というものです。写本の調査がすすんだ今日では、やや価値の劣るものとなってしまいました。しかし、抄物研究の先がけである湯沢幸吉郎著『室町時代の言語研究』（1929）が刊本によっていることを思えば、資料的価値はいぜんとして高いということができます。

ここでは次の四書を取りあげて、中世語資料という観点から紹介することになります。



無門関抄上・下 長恨歌抄 江湖集抄

- 『臨濟録抄』（四巻四冊） 寛永9年（1632）刊
- 『長恨歌抄』（二巻一冊） 刊年不明
- 『無門関抄』（二巻二冊） 寛永10年（1633）刊
- 『江湖集抄』（四巻四冊） 寛永10年（1633）刊

臨濟慧照禪師語録抄一・二・四



図版①

まずは『臨濟録抄』巻三四から紹介します。図版①（巻四14才）に「ワラウジ」「スネ苦行」という語が見えます。「ワラウジ」は「わらうづ（草鞋）」の变化形で、『日本国語大辞典 第二版』（以下、「日国」と略称する）の初出例（最も古い例）は『東海道中膝栗毛』（1802）ですから、この例は200年もさかのぼります。中世語というには「ワラウヂ」ではなく「ワラウジ」であるのが残念なところ。「スネ苦行」は方々を苦勞して歩き回ることを表す語で、用例はもっぱら抄物に限られます。禅僧の修行体験にもとづく語か。



図版②

図版②（巻四15才）に「ソウ」「シヤ」「イツカケン」があります。「ソウ」は「さふらふ（候）」から変化した丁寧語で、現代のデス・マスにあたります。「シヤ」は西日本方言でいまも用いる断定の「じゃ」で、本来なら「チャ」と表記されます。濁音をきちんとつけない当時の表記では、「イツカケン」は「一家見」か「二家言」か分かりません。日国によると、「二家見」の初出は河上肇『貧乏物語』（1916）、「二家言」は『春色梅美婦禰』（1841）です。私見では文脈から「二家見」らしく、だとすれば300年近くも古い例となります。



図版③

図版③（巻四16才）の「タチタチト」は原典「佇立」の説明。抄物には講義体という性質からオノマトペ（擬声語・擬態語）の使用例が多い。聞き手に直感的に理解してもらいたいとき、大学の講義でも思わず使ってしまう。「タチタチト」はその一つで、抄物に現れるのが最初です。「立ち立ち」との濁音化でしょうか。



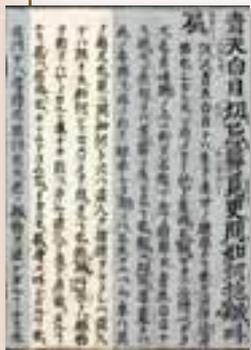
図版④

次は『長恨歌抄』から。図版④(5才)はその冒頭部分で、楊貴妃が絶世の美女であるだけでなく人柄もすぐれていたと述べる所、「無著」に振り仮名「ブタシナミ」があります。「ブ」は漢語「無」、「タシナミ」は和語だから「重箱読み」となり、「ぶざま(無様)」などと同様の語構成です。日国には狂言や俳諧の用例をあげていますが、文脈がそなわるものとしては本例がふさわしい。



図版⑤

次は『無門関抄』の紹介。図版⑤(上巻22ウ)に「シブル」「自由」の語があります。「シブル」は車輪の回転に支障があることで、日国の初出も『周易抄』(1499)の「輪ガシブル」です。形容詞「しぶい」の動詞化でしょうか。「自由」という語は、ここに見えるように、前後左右へ自在に動き回ることに「勝手気ままに」というのが本来的な意味です。明治になって英語freedomやlibertyの訳語を「自由」としたために問題が生じました。「自由とは自分勝手なことではない」と説諭するはめにあったのは思えば皮肉なことです。



図版⑥

図版⑥(下巻17オ)には「盗人デ走」「贓物」「屈身シテ」の語が見えます。「盗人デ走」の「走」は図版⑦で説明した丁寧語「ソウ」の宛字です。盗人であることを自白した会話文で、神妙に申し出たことばとして用いられています。「贓物」は日国では新井白石の自伝『折たく柴の記』(1716頃)が初出で、次は明治40年制定の刑法256条です。本例は100年も古いものとなります。「盗品」を抱えたまま捕まっては自白するしかありません。

「シンシン(伸身)」と並んで「クッシン(屈身)」という語がよく出てきました。日国で「屈身」の初出例は14世紀前半の『三国伝記』(漢文)で、次は近代の辞書の例です。日本語文で確かに「身をかがめる」意で使用されていたことを示す貴重な例となります。



図版⑦

図版⑦(下巻20オ)では、飯中の沙ズキものと言っています。実は、日国はこの箇所を例に引いて、「④思いやりがなく扱いが乱暴である。薄情だ。ひどい。」の意味だとしています。誤りです。なぜなら、飯の中の沙(砂)なら「ひどい」ですむとしても、泥中の棘(イバラ)とげ)となれば隠れた危険物となりますから、③の「こわい。」

の例とすべきでした。日国とはいえ完璧ではありません。ちなみに筆者は福岡県南部の出身ですが、子供時代には「恐い」ことを「エズイ・エズカ」と言っていました。出雲方言なら「オゾイ」(正確には「オゼー」と言うところ)です。

最後に『江湖集抄』を紹介しました。図版⑧(巻一3ウ)に「アテツ」の語が見える。「アテツ」は日国には明治の『和英語林集成』(1872)の例しかありません。つまり、本例は極めて珍しい例なのです。日国は漢字表記を「当図」としていますが、「あてど(当所)」が変化して「あてづ」となった可能性もあります。意味は、次の文に「底心(そこ)ころ」とありますから、隠れた意図・目的といったところでしょうか。



図版⑧

図版⑧(巻一11オ)には「スシヤケ・スシ桶」があります。「スシ桶」は、『日国』に『竹馬狂吟集』(1499)が初出、次が『犬子集』(1633)の例です。食品が発酵して「酸っぱく」



図版⑨

なったのが「すし(醉し)」ですから、近江の鮒鮓(ふなすし)のように、魚と飯をませて発酵させるための桶が「スシ桶」です。現代の「寿司桶」とは違います。

最後に文法的な話を一つ。この4行目に「入レラレヨウズヲハ、末行に「愁ヒヨウス」と助動詞「ヨウズ」らしい語が見えています。現代の意志推量の助動詞「よう」は、古語「む」が「う」へ変化した後、発音の変化にともなって「う」から分かれたもので、「むとす」が変化した「うず」からも「よとす」が生まれます。ただ、その時期は明確ではありません。「入レラレヨウズ」を「入レラレヨウズ」と分析すれば、すでに「ヨウズ」となっているように見えますが、「愁ヒヨウス」の「愁ウ」は下二段活用ですから「愁ヒヨウズ」とは分析できず、「愁へウズ↓愁ヒヨウズ」と考えねばなりません。だとすると前者も「入レラリヨウズ」と読むのが穏当で、本書ではまだ「ヨウズ」は生まれていないことになりません。厳密な論証ではありませんが、近代語への文法変化の過程をしるうえでも抄物が重要な資料となる例として示しました。

抄物が中世語の資料として有益であることをお伝えできたでしょうか。ここに取りあげた四書には、調べればまだまだ興味深い言語事実があることでしょう。「相坂先生寄贈資料」には他にも面白そうな抄物があります。読むには多少の努力が必要ですが、このような貴重な資料が図書館の書庫で皆さんの利用を待っているのです。

(たこもりひろし)

# 情報活用ステップアップ講座

—レポート・論文作成、研究に役立つデータベースを使いこなそう—

自分の研究テーマにはどのような文献があるのか調べたい、自分が読みたい文献がどの雑誌のどの巻号に掲載されているのか分からない、この研究者がどんな論文を書いているのかを知りたい…そんな時に活用するのが文献データベースです。

ただ、一口に文献データベースと言っても、島根大学で利用できるものだけでも有料・無料を含め、様々なものがあります。その中から、自分の求める分野・求める言語のデータベースを選択することが、情報を得るための第一歩だと言えます。

今回は、医学系文献データベースの中でも主なものを4つ紹介します。

情報は何についてもそうですが、特に医学系の情報は鮮度が命！

紹介するどのデータベースも頻繁にデータが更新され、常に最新の情報を提供しています。

各文献データベースの検索結果には、電子ジャーナル等の文献本文にリンクされているアイコンなどが表示され直接原文献を利用できる場合があります。

また、Shimane LINKS のアイコンから大学で所蔵する資料の所在や、電子ジャーナルの有無が確認でき、学内に所蔵がない場合には、学外へ複写依頼をすることもできます。

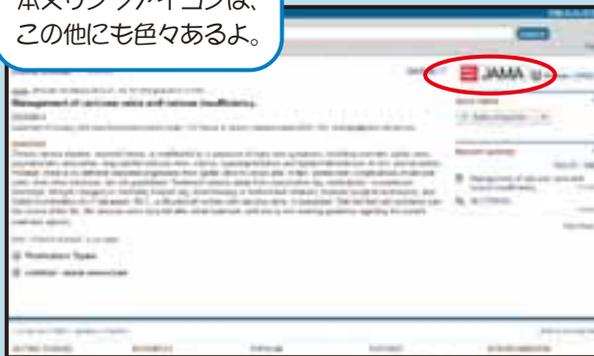
必要な情報を、効率良く入手するために、文献データベースを大いに活用してください。



## 医学系データベースを使おう!

何が使える? どう使う?

本文リンクアイコンは、この他にも色々あるよ。



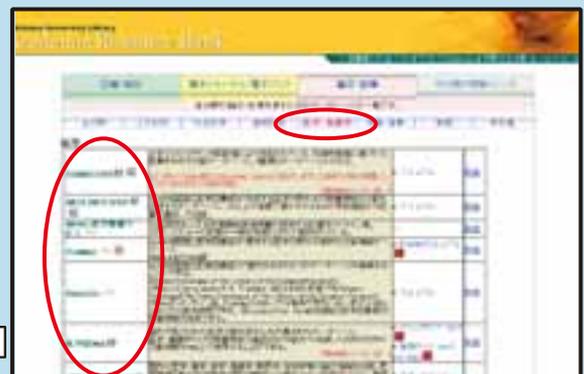
④電子ジャーナルへのリンクがあることも…



①図書館 HP から『論文・記事を探す』をクリック

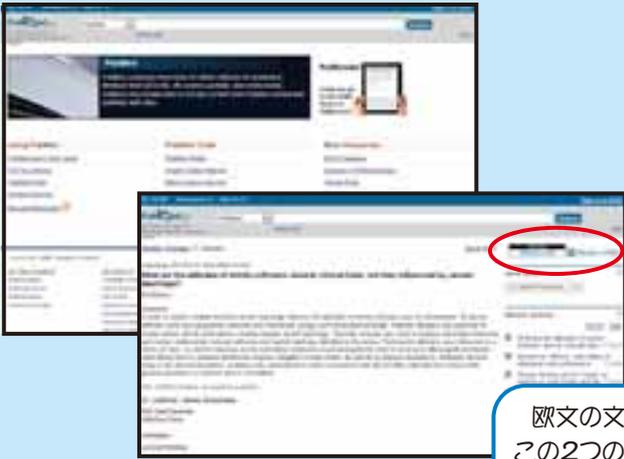


③データベースに検索語を入力

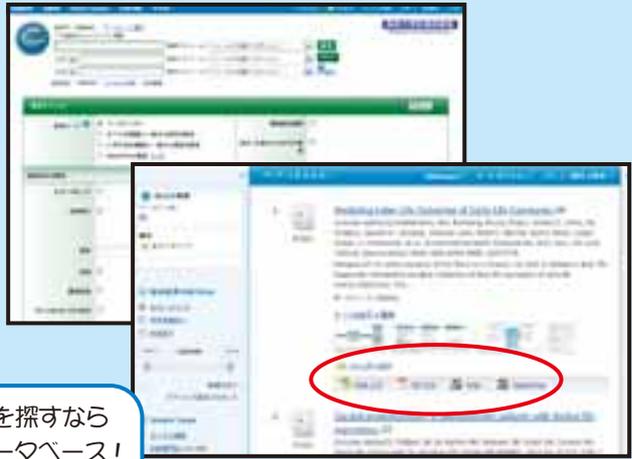


②上段の分野より『医学・看護学』をクリックし、使いたいデータベースをクリック

- NLM(米国国立医学図書館)が収集した、1946年以降の医学・薬学・看護学・歯学の文献が検索できるデータベース。
- 米国を中心に約80カ国、60以上の言語で書かれた雑誌約5,600誌から2,200万件を超える文献情報を収集し、毎日2,000~4,000件が追加されている。(90%以上が英語)
- 同時アクセス数:無制限



- CINAHL Information System社作成の、看護学関連の基本的な外国語文献データベース。
- 1981年以降の看護学・生体臨床医学・健康科学・代替医学・消費者健康など、看護学関連17分野の雑誌約3,000誌の200万件を超える文献情報を収集し、看護に必須の情報をカバーする。
- 同時アクセス数:4



欧文の文献を探すなら  
この2つのデータベース!

## PubMed

世界的医学情報データベース「MEDLINE」のWeb版

## CINAHL

看護学関連外国語文献の基本的データベース

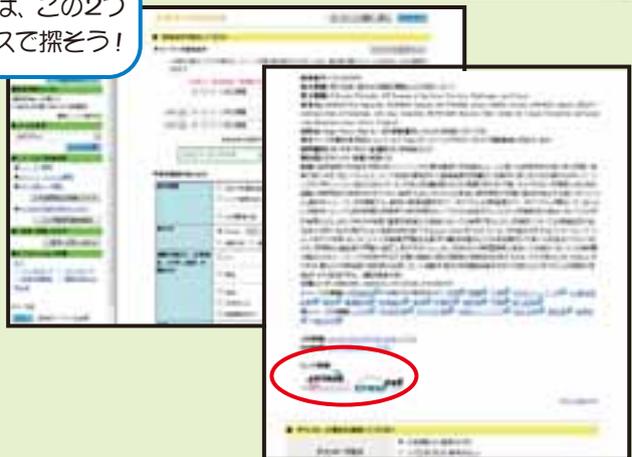
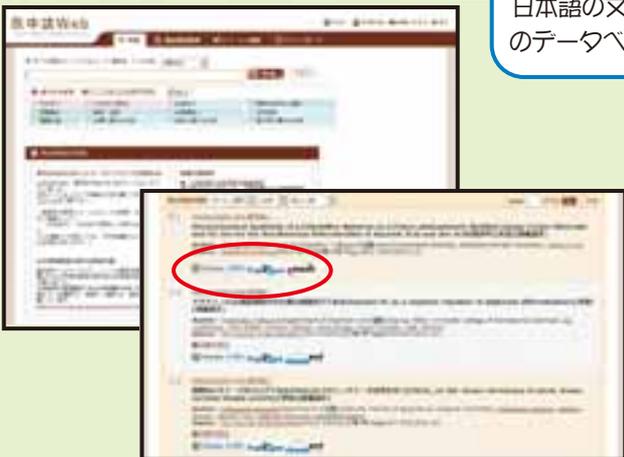
## 医中誌Web

国内医学文献抄録誌「医学中央雑誌」のweb版

## JMED Plus

日本語の医学周辺分野の検索に!

日本語の文献は、この2つのデータベースで探そう!



- 医学中央雑誌刊行会が提供する国内医学系論文情報のデータベース。
- 1983年以降に国内で発行された医学・薬学・歯学及び関連分野の定期刊行物約5,000誌からの文献情報約750万件を収録し、年間30万件以上を再録している。
- 同時アクセス数:8

- 独立行政法人科学技術振興機構が作成する国内の科学技術総合データベース『JDream II』の医学系論文情報データベース。(2013年4月からJDream IIIに移行予定)
- 1981年以降に国内で発行された医学・薬学・歯学・看護学・獣医学・生物学等の雑誌約1000誌より文献情報580万件を収録し、現在も年間約37万件が追加されている。
- 同時アクセス数:12

# 図書館員のお仕事



## 第98回全国図書館大会 島根大会 参加報告

「文化を伝え未来を創る図書館 古事記編纂1300年 神々の国しまねから」

企画・整備グループ 矢田 貴史

平成24年10月25日と26日の2日間、松江市を会場に全国図書館大会が開催されました。

この図書館大会は、社団法人日本図書館協会主催のもと明治39年からほぼ毎年開催されている歴史あるイベントで、今年で98回を数えます。全国から図書館関係者が一堂に会し、図書館が直面している諸課題について研究協議することで、図書館活動の一層の活性化を図ることを目的としています。

島根県を会場として開催されるのは2回目で、前回は昭和50年(1975年)、実に37年ぶりです。参加者は1,000人規模、12分科会に分かれる大規模なイベントとあって、会場も島根県民会館、くびきメッセ、島根県立大学松江キャンパスの3箇所を使って行われました。

1日目の10月25日は、島根県民会館で日本図書館協会による基調報告と、記念講演が行われました。一般の方の来場

も多かった記

念講演は、二  
ト問題の研  
究や「希望学」  
で知られる東  
京大学社会科  
学研究所教授  
の玄田有史氏

### 分科会ごとのテーマ一覧

分科会・分科会名	テーマ
第1分科会 公共図書館	公共図書館 今・そして未来へ
第2分科会 大学・短大・高専図書館	学習・教育のハブを目指して ー教育と連携した大学・短大・高専図書館のサービスをデザインするー
第3分科会 学校図書館	学校図書館の可能性を探る
第4分科会 児童・青少年サービス	子どもと本と図書館と ー子どもの側に本をー
第5分科会 専門図書館	専門図書館:館種を越えて絆を結ぶ
第6分科会 図書館利用に障がいのある人々へのサービス	障がい者サービス・多文化サービスの発展にむけて
第7分科会 図書館の自由	図書館利用者のプライバシーを考える
第8分科会 著作権・出版流通	著作権法改正と、電子化資料と電子書籍
第9分科会 資料保存	被災資料の救済 ー東日本大震災をふりかえるー
第10分科会 図書館学教育	新しい養成カリキュラムの開始と地方の司書課程・司書講習
第11分科会 図書館の管理運営	業務委託・指定管理者制度の運用

(松江市出身)による「希望のチカラ」というテーマでのお話でした。学生時代の図書館でのエピソードや、専門の労働経済学の観点からみた図書館の役割などについて、専門用語を使わないユーモアある語り口で話され、会場からは多くの笑いがおこりました。

2日目は館種やテーマに応じたバラエ

ティに富んだ12の分科会で活発な協議が行われました。

各分科会のテーマは右表のとおりです。今回私は第2分科会に参加するとともに、島根大学の図書館コンシェルジュの活動も紹介してきましたので、以下、第2分科会の内容について、簡単にご報告します。

### 第2分科会

学習・教育のハブを目指して

ー教育と連携した大学・短大・高専

図書館のサービスをデザインするー

午前は基調講演と基調報告が行われ、午後は2つの会場に分かれ事例報告がされた後、最後に全体でのパネル・ディスカッションという進行でした。

### ■基調講演

竹内比呂也氏(千葉大学附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長)「高等教育に改革をもたらす新たな学習環境の構築:千葉大学アカデミック・リンクの試み」

竹内氏の講演では、中央教育審議会の答申なども参照しながら、大学教育が「TeachingからActive Learning」へと方向転換を迫られており、大学図書館もこの変化に対応した新しい学習環境やサービスを構築していく必要があることが述べられました。さらに、このことへの具体策として、千葉大学で始めた図書館機能をベースとした新しい学習環境のコンセプトである「アカデミック・リンク」の取り組みを紹介いただきました。

多様なニーズを取り込む魅力的な空間に、そこで提供される豊富なコンテンツ、さらには学生・職員・教員が一体となった人的支援サービスまでを有機的に結びつけようという、とても意欲的なプロジェクトだと感じました。

千葉大学のアカデミック・リンク・センターは国内でも先進的な事例として、大

学関係者の大きな注目を集めています。詳細は、センターHPをご覧ください。  
(<http://alc.chiba-u.jp/>)



### ■基調報告

橋本春美氏(東京女子大学教育支援部 図書館課長)「ポスト『マイライフ・マイライブラリー』—学習滞在型図書館における学習・教育支援の可能性」

橋本春美氏による基調報告では、文部科学省の学生支援G.Pの採択事業として展開された東京女子大学での取り組みについて、これまでの5年間の活動実績と今後の展望をご報告いただきました。特に図書館内のピアサポートについては、本学の図書館コンシェルジュを企画した際に最も参考にさせていただいた事例の一つです。多様な学生ニーズに

対応するための人的支援のあり方、支援する側である学生スタッフ自身の成長を促す仕組み作りなど、難しい課題についても、大学のミッションや特色に応じたて上手く舵取りされており、大変参考になりました。

### ■事例報告(第1会場)

- (1) 篠森敬三氏(高知工科大学附属情報図書館長)「電子リソースを活用した学習支援環境の構築」
- (2) ステイブン・W・ヘネベリー氏(島根県立大学総合政策学部専任講師)「iPadを活用したラーニング・コミュニティの活用」
- (3) 矢田貴史(島根大学附属図書館「ピアサポート」による図書館での学習・教育支援—島根大学における取り組みと課題—)

### ■事例報告(第2会場)

- (1) 岩田英作氏(島根県立大学短期大学部教授)「おはなしレストラン・ライブラリーの取組—読み聞かせの活動拠点として—」
  - (2) 中村元氏(松江工業高等専門学校図書館長)・服部真弓氏(同人文科学科准教授)「松江高専図書館の現状と取組み—英語100万語多読の実践報告」
  - (3) 久保山健氏(大阪大学附属図書館利用支援課「ラーニング・コミュニティ」における授業実践)
- 事例報告では、各大学で実践されている学習・教育支援の取り組みについての

報告が行われました。

この中で、島根大学附属図書館におけるピアサポートであるコンシェルジュについても報告を行いました。図書館コンシェルジュの設置目的やこれまでの経緯、授業と連携した学習支援の実践例、図書館サービス改善のための活動など、具体的な取り組みを紹介しました。広くコンシェルジュの活動を知っていただく機会を得られたことは大変嬉しいことでしたが、発表の準備をする中で、教員との連携の難しさや、実施効果をどのように測定するかなど、今後の課題の多さを再認識する機会となりました。

### ■パネル・ディスカッション

最後に、千葉大学の竹内氏をコーディネータとして、パネル・ディスカッションが行われました。講演や各報告を踏まえ、図書館が、所属機関の教育や学習にどこまで寄与できるのか、そのためにはサービスや環境をどのように再構築していくべきかなど、活発な議論が交わされました。



### ■用語解説

□アクティブラーニング  
教員による一方向的な講義形式の授業ではなく、学生の主体性を重視し、課題研究やPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業形態を総称して用います。

□ラーニング・コミュニティ  
学生の自学自習を促す空間とサービスを提供する場として、近年多くの大学図書館で整備が進められています。図書館で利用できる学術資源を活かしながら、グループでの共同学習やITを利用した学習が可能なスペースとして、従来の図書館では難しかった多様な学習環境の提供を目指しています。改修後の図書館では、これに準ずるスペースを設ける予定です。

□ピアサポート  
ピアサポートは、学生による学生のための支援活動を指します。同世代のため質問しやすいことや、支援する学生自身の成長も促されるといったキャリア教育の面での効果も期待されています。図書館にとっても、学生に運営に関わってもらうことで利用者目線でのサービス改善を図ることができ、今後もコンシェルジュの活動をより発展させた形で継続できればと考えています。

(やだたかふみ)

図書館コンシェルジュ報告

Library Concierge Report

平成24年度の活動報告

今年度のコンシェルジュは13名、うち10名が未経験者のため、例年のようにカウンターでの対応のしかた、資料の場所をしっかりと覚える研修から始まりました。図書館改修工事でも8月から休館のため、前期のみ、利用サポート中心の活動でしたが、知名度があがってきたせいか職員よりコンシェルジュに尋ねる利用者が増え、コンシェルジュ側もそれに応えようとする高い意識が感じられるようになりました。自信がつくと対応のしかたもどんどん上達し、リピーターに繋がります。コンシェルジュは、今後いっそう頼りがいのある存在になつていくことでしょう。

昨年度からの経験者を中心に、自主的にサービス改善の企画にも取り組みました。好評だった「数学パスファインダー」は継続され、得意分野やセンスを活かした手作り



の「しおり」や「貸出バッグ」は利用者に喜ばれています。季節感を出した掲示板のディスプレイも通りがかりに目をひきました。利用者の反応を感じられることで、いっそうやりがいが増したようです。

第二回大学図書館 学生協働交流シンポジウム



「私たちができる図書館づくりー学生協働の様々な場への広がりー」

平成23年度に続き、第二回目となる標記シンポジウムが9月10日(月)、11日(火)に島根県立大学浜田キャンパスで開催されました。島根大学からは5名のコンシェルジュが参加して、活動内容の発表、他大学との交流を体験しました。他館との情報交換を通して、利用しやすい図書館づくり、島根大学らしい活動、地域との交流をもっと進めるには、など、今後の活動に向けた課題や問題点も浮かび上がってきました。志を同じくする学生たちと触れ合い刺激を受けることで

活動が活性化され、アイデアややる気がさらに膨らんだことでしょう。

ただ座って待つのではなく、利用者のことを考えて行動する、積極的に声掛けをするなどは、思っているもなかなかできないことです。また、コンシェルジュの活動はコミュニケーションやチームワークも大切です。この経験で得た知識、考え、対応のしかた、人脈を活かしさらにパワーアップして来季へのバトンタッチができることを期待します。

平成25年度のシンポジウムは島根大学で開催されるため、前期はその準備が重要な活動のひとつとなります。図書館コンシェルジュは来年度も募集する予定ですので、図書館活動に興味がある方、応募をお待ちしています。

コンシェルジュリーダーを 総えて

総合理工学部 数理情報システム学科 木南成明

こんにちは。第3期図書館コンシェルジュリーダーの木南成明です。今年度のコンシェルジュは13人で、8月から図書館改修工事が始まったため、前期だけの活動でした。キャメル色のエプロンを着用してサブカウンターに座り、図書館を利用されるみなさんのお役に立てるよう活動してきましたつもりですが、皆さんから見ると、私たちコンシェルジュはどのように映ったのでしょうか。

図書館の利用サポートのほかに、コンシェルジュお手製のしおりを配布したり、お薦めの本をブックコンパスコーナーで紹介したりしました。また、後期からはコンシェルジュが作成した「布製貸出バッグ」の利用も開始しています。1人でも多くの方に利用していただければ幸いです。

ば幸いです。

さて、私自身は第1期からコンシェルジュ活動に参加していることもあり、今年度はリーダーをさせていただくことになりました。まず、新規メンバーとして加わった10名に対して個人研修を実施しました。また、定期的に飲み会や親睦会も開催し、コンシェルジュ間の親睦が深まるよう工夫してきましたつもりです。・が、コンシェルジュのメンバー全員を集めるというのは簡単なようでも難しいことでした。メールが届いていないか、届いていても返信されない方もいたり、届いていないと円滑に進まず、リーダーシップの重要性を実感しました。後期は正規の活動はしませんが、もうしばらくはブログの更新等で、わずかながらみなさんとの接点があると思います。また、来年度になれば新しい図書館でコンシェルジュが活動します。その頃には私は卒業してもういないのですが、今後ともコンシェルジュの活動に注目していただければ幸いです。



(こみなみしげあき)

# 出版報告

## 島根の国絵図

出雲・石見・隠岐

島根大学附属図書館 編  
今井印刷  
2012.12  
ISBN: 9784906794157



島根大学附属図書館は、現在の島根県の出雲国、石見国、隠岐国で作成された国絵図(古地図)を豊富なカラー図版と解説で構成した『島根の国絵図—出雲・石見・隠岐—』を出版しました。

国絵図は、江戸幕府の命で国毎に作成されて幕府に献上されたものです。幕府へ献上されたもの他に、藩の行政目的のために藩独自に作成されたものや、献上図の写しが様々な形で作成され、使用されてきました。

本書は、本学附属図書館が収蔵した国絵図の他に、広く県内外の機関や個人が所蔵する国絵図の写真85点を集め、専門の研究者による解説を加えたものです。さらに、伊能忠敬による「伊能図」を経て、明治初期に近代地図が成立するまでの過程をたどりしました。

島根県の出雲・石見・隠岐の国絵図を体系的に集めて解説した本は本書が初めてであり、また、都道府県単位でまとめた類書は他にほとんど例のない画期的なものです。さらに、本書掲載の国絵図の内、65点を本学附属図書館のデジタル・アーカイブに掲載し、本書を読み進めながらインターネットのデジタル・アーカイブで国絵図の画像を拡大表示して見ることができる他、48点については本学附属図書館で複製版の閲覧ができるようにして、国絵図を詳細に閲覧したい読者の便宜を図っています。

【本館郷土 291.73/ Sh42】

# 書評

法文学部准教授 飯野公央

## ■絵葉書が語りかけるもの

松江絵葉書MUSEUM

なつかしの松江

明治・大正・昭和初期絵葉書コレクション

今岡弘延 著

ワン・ライン

2012.5

ISBN: 9784948756670



松江のまちは江戸時代からのたたずまいを今も色濃く残すまちの一つとして紹介されることがあります。確かに松江城周辺にはそのような景観がわずかながら残されているのも事実です。しかしながら観光化され、商品化されたその景観は、住民の暮らしとは無縁なものとして切り離された存在となっています。まして、本学が位置する川津地区や学園通りは、建築の無法地帯といえるほどにおぞましい姿を形成しています。こうしたまちの姿は、近代化の過程で人々の暮らしと風景とが分断された結果とも言えるでしょう。

明治23年英語教師として松江に赴任したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は松江のまちを愛し、その風景とそこで暮らす人々を賛美する一方で、次のような危機感を持っていました。

「古い家中(かちゅう)屋敷もその庭も永遠にきえてしまうのにそう長い歳月を要しないだろう。すでにわが家の庭よりも広くて美しい庭が数知れず田んぼや竹やぶに変わってしまった。そして古風な出雲の町も、長い間の懸案だった鉄道が一たぶんあと十年を待たずして一開通すれば、膨張し、変貌し、月並みの町になって、この地所を工場や製作所の用地に転用せよと言いつくすだろう。ここだけではない、日本の全土から、昔ながらの安らぎと昔ながらの趣が消え去るのは免れぬ定めらしい(『神々の国の首都』『日本の庭で』より)。

今回の『なつかしの松江』の中で紹介させていただいた絵葉書は、民間会社に絵葉書の発行が許可された明治30年代～昭和初期までのものがほとんどですが、それらをつぶさに見ていくと、かつてのまちがいかに人と人をつなぐ「場」として機能していたかがわかります。絵はがきに描き出された景観を懐かしむことはもちろん、そこに暮らす人々の息吹とまちとの関係性を感じ取るような「絵解き」を是非楽しんでいただけたらと思います。そして、「ランドスケープ」が「ランド・エスケープ」とならないようなまちづくりを私達は目指していきたいものです。

(いいの きみお)

【本館郷土 217.3/146】

# 職員寄贈図書

(平成 24 年 3 月～11 月)

小林祥泰 (学長)	今日の精神疾患治療指針
	神経疾患最新の治療 2012-2014
	内科学 第8版
	“Uncommon”脳卒中学：見落とせない発症要因
	神経・筋疾患
	神経眼科
	高齢者への包括的アプローチとリハビリテーション
飯野公央 (法文学部)	なつかしの松江
遠藤昇三 (法文学部)	労働保護法論
長岡真吾 (法文学部)	亡霊のアメリカ文学：豊饒なる空間
林 弘正 (法務研究科)	相当な理由に基づく違法性の錯誤
作野広和 (教育学部)	松平小学校の跡地利用を考える (人文地理学教育・研究叢書 40)
	安来市地誌 (人文地理学教育・研究叢書 42)
山口修平 (医学部)	脳血管障害ケーススタディ
谷口憲治 (生物資源科学部)	中山間地域農村発展論
芦田耕一 (名誉教授)	江戸時代の出雲歌壇
松尾 寿 (名誉教授)	城下町松江の誕生と町のしくみ (2刷)
附属図書館	島根の国絵図：出雲・石見・隠岐

## ● 研修報告

# 第42回中国地区 中堅係員研修

企画・整備グループ 矢田 貴史

日時 平成24年7月10日(火)～13日(金)  
場所 広島合同庁舎

平成24年7月10日から7月13日までの4日間、人事院主催の中国地区中堅係員研修(会場・広島合同庁舎)に参加してきました。この研修は、中堅職員として各所属機関での職務遂行に必要な基礎知識、技術、態度等を修得することが目的とされており、中国地方の国家公務員や国立大学法人など、38機関から48名が参加しました。

研修の内容は多岐にわたり、「公務職場におけるコミュニケーション」、「公務員倫理」、「ロジカルシンキング」、「チームにおけるキャリア形成」といったテーマでの実習を交えた講義のほか、グループに分かれてのディベートを行いました。

講義と並んで研修の柱となっていたのがディベートとその準備のためのグループワークで、4日間の研修日程

のうち半分近くの時間が充てられました。今回実施されたのは、いわゆる競技ディベートで、あるテーマについて賛成派と反対派に分かれ、制限時間など一定のルールのもと、交互に弁論や反論を繰り返します。ディベートの後には、審査団が双方の主張の論拠や推論の妥当性などをもとに評価し、勝敗を決定します。

準備されていたテーマは、1.「節電のためのサマータイトム制実施の可否」と、2.「国家公務員庁舎内での全面禁煙の可否」の二つで、当日の抽選より、私たちのグループは、2.のテーマの「反対派」、つまり「全面禁煙は妥当ではない」という立場で弁論をすることにになりました。近年のたばこ規制や法制度の整備状況を鑑みても、賛成派に比べ有利とはいえません。グループでの話し合いの結果、不利な立場であることを前提として、真正面から相手とぶつかる主張をするのではなく、全面禁煙賛成派が弁論で主張してくるであろう内容を想定し、主張の矛盾や過度規制の問題点を突くことで勝利を目指すことにしました。

事前にディベート法の簡単なレクチャーはあったものの、私も含め本格的なディベート経験がない人ばかりのグループだったため、論点の洗い出しや本番での弁論の進め方、相手からの尋問をどうやってかわすかなど、手探り状態で本番への準備を進めます。やつ

ている最中は時間が足りないと感じ焦ることも多かったですが、振り返ってみると、短い時間内で有利な情報源を収集し論拠を固めたり、協調しながら弁論内容を組み立てたりといった作業は、普段の業務では味わえないものでもあり、貴重な体験だったかもしれません。幸い本番のディベートでも、概ね想定通りの流れで勝利することができました。

研修の一番の収穫は、広く公務に就いているという点では同じでも、全く異なる仕事をしている同年代の方々と意見を交わすことができたことだと思います。参加者の所属先は、大学や高専といった高等教育機関だけでなく、労働局、整備局、裁判所、検察庁、公安調査局など、様々でした。一口に公務員(正確に言えば、国立大学の職員は公務員ではなく法人職員ですが)といっても、多様な機関で多様な人材が働いていること、そして、各々の立場で、何を目標として働いているかといった点を、研修を通して(あるいは研修以外の時間も使って)語り合うことができたのは、図書館や大学関係など限られた範囲での交流機会が多い中、この研修の価値を際立たせるものだったと思います。

(やただかふみ)

# 中国四国地区 大学図書館 研究集会

企画・整備グループ 山崎 文子

日時 平成24年10月11日(木)～12日(金)  
場所 鳥取大学附属図書館



この研究集会は、中四国地区の国立大学各図書館が順番に会場を担当し、毎年テーマを決めて開催されています。今回は、鳥取大学で図書館の広報とリスクマネジメントをテーマに、大学図書館に勤務する職員約50名が参加しました。

研究集会の内容は、講演、7館からの



発表・報告、分科会の各部により実施されました。

特に、リスクマネジメントの分科会で、東北大学職員の方から、東日本大震災での避難の実態が聞けた事は、大変有意義だったと思います。

私は「広報戦略の現状と課題―島根大学附属図書館での広報活動―」という題で、一番目の発表でした。内容は、昨年7月から図書館に勤務して初めて知り得た事実(例えば、OPACにより、Web上から借りたい図書を検索・予約できる、官報等の新聞もWeb上か

ら読める、図書館マスコットキャラクターがいるetc)の多さでした。また、様々な活動・行事をしている事も知らなかったため、もっと色々な手段を使って学内外へ知らせる事が必要であると感じ、大学ホームページ、大学Page Book等への頻繁な投稿を実施した事例を報告しました。参加者の方からは、「図書館職員としては当たり前な事が館外からは当たり前でない事実を知ることが出来た。」と言った評価をいただきました。

本学図書館もまだまだ皆さんまで届けることが出来ていない情報があると思います。今後も、色々なツールを活用しながら、もっと親しみやすい図書館を目指したいと考えています。

(やまさき ふみこ)

## 平成24年度 漢籍担当職員 講習会(初級)

企画・整備グループ 山崎 月子

日時 平成24年10月1日(月)〜5日(金)  
場所 京都大学人文科学研究所

この講習会は、漢籍の取扱いに関する



る知識と技術を学び、学術資料としての漢籍の有効な利用体制の整備を図ることを目的に実施されているもので、漢籍の概要、漢籍目録の構造、漢籍データベースの内容、ZACSS-CATと漢籍データベースの関係についての講義と、カード目録及びデータ入力の実習を並行して行うものでした。

漢籍とは、中国人が漢文で書いた書物のことです。ただし、1911年(辛亥革命)以降に口語で書かれたものは現代中国書として扱います。また、日本人や朝鮮人によって漢文で書かれた書物は和刻本、朝鮮本などと呼ばれていますが、これらは準漢籍として扱います。漢籍は割と粗末な紙と綴じ糸が用いられていて、丸めて片手で読むもの、それに対し、和刻本は上質な和紙と丈夫な糸で綴じられ、きちんと文机で読む。その体裁の違いは書物に対する意識の差の現れであるとのこと。漢籍の書名は表紙からは取らないのです

が、漢籍は壊れやすく何度も綴じ直され、表紙が変わることが普通であったためです。

目録を取る目的は何か。漢籍では、例えば、孔子の「易」という「書」が様々な刊行形態で「本」になれば、それらは全て違うものであると考えられています。目録を取ることは、どのような「本」であるか明確化するために行うもの、書の伝承の経過を明らかにする拠所となるものです。

カード目録は『漢籍目録カード』のとりかた 京都大学人文科学研究所漢籍目録カード作成要領(京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編)に基づき行います。漢籍は壊れやすいので取扱いに気を付けることや、机の上で開く、印刷されていないところをめくる、持ち歩かない、鉛筆のみ使用など、まずは目録を取る前に心構えを教わりました。

目録の項目は書名・巻数(冊数ではない)・撰者(王朝名+著者+役割)・鈔刻(出版事項)つ+どここの+誰が+どこで+どうした)です。同じ書物の複製本でも書名・分類が異なることがあるため、必ず現物の中身を調べる必要があります。また、漢籍には奥付がありませんで、撰者や鈔刻が本文を読まないと判別できないものも多くあります。「漢文を読む」これが最も難しいことで、訓点など全くない漢文は読めるは

## ● 研修報告

ずもなく、意味もわかりません。講師の先生にとにかく質問し、粘って時には答えを教えてもらいながらの悪戦苦闘です。また、撰者や鈔刻の内容を確認するためには工具書と呼ばれている参考図書がないと一歩も前に進まない作業になりました。中級の講習会ではWeb版の参考図書が使えるのですが、初級は冊子体だけだったので、久しぶりにアナログの世界に浸りました。

全国漢籍データベースは、従来の漢籍目録をベースにしたもので、NACSIS-CATとは別のデータベースとして構築されているものです。本学ではこのデータベースには参加していませんが、検索はできますので、目録を作成する際に利用すれば、参考になりそうな資料を探すことができます。

この講習会を受講して改めて、漢籍の内容から目録を取るためには、専門知識がないととても困難なことだと分かりました。これは教員と連携して進めていくことが大切だと思います。そして、工具書は目録作成のためのツールとしてできるだけ整備する必要があります。

また、全国漢籍データベースへの参加協力のお話がありました。

NACSIS-CATと構造の違う書誌をさらに作成することはなかなか難しいことだと思いました。

講義の中で、「漢籍を文化財として後世に引き継いでいく」というお話があり、これまで敬遠していた漢籍ですが、きちんと整理することで、それらが貴重な史料になると思えるようになりました。また、「学ばないより学ぶに越したことは無いし、いつかは役に立ちます」「図書そのものに対しての知識の幅が広がります」というお話には、本当にその通りだと思いました。講義を聞く、古い本を手に取りめくる、紙のカード、鉛筆での手書きなど、普段の仕事では得られない満足感があり、学びの楽しさを実感した講習会でした。

(やまさき つきこ)

## 島根大学 サブリーダー研修

情報サービスグループ 金子 尚登

日時 平成24年8月22日(木)～12月13日(木)  
場所 島根大学

この研修は本学職員のうちサブリーダー(係長、専門職員、主任等)を対象に行われているものです。出雲キャンパ

スの方や遠隔地で勤務されている技術職員の方もいて、日常業務ではなかなか接点がない方と知り合うことができました。

私は平成24年4月にお隣の鳥取大学から異動してきたため、他の部署の職員の方をあまり存じ上げていなかったのですが、この研修にて、いろいろな部署の方とお話することができました。外からみた図書館のイメージを聞くこともできましたし、広報ツールを見ていただいているとうかがって、とてもうれしく思いました。また研修で一緒だった方と、次の日業務上の打合せ：ということもあり、ただ単に知識を習得する以上の収穫があったと思っています。ただ、図書館の利用者はもちろん学生と教員が多いのですが、職員の方にもたくさん利用していただきたいです。図書館をアピールする一つの機会でもあったと思うのですが、その点でいまひとつだったかなと少し後悔しています。

内容はイントロダクションとして心理テストによる自己分析からはじまり、リーダーシップやコミュニケーション問題発見解決についてなど、合わせて6日間におよぶものでした。6日間といっても連続して行うのではなく、開催日が約1カ月おきで約4カ月間にわたって行われた点です。これは単に講師の話聞く研修ではなく、課題や目標を設定し、個々の職場に持ち

帰って次回までの1カ月間に実行し、結果を評価して、改善する、業務改善の手法の一つであるPDCA(Plan, Do, Check, Act)サイクルを行うために組まれた日程でした。うまくいかないこともあってなかなか大変ではありましたが、時間をかけたことでより意識するようになり、その点はよかったですに思います。

最近様々な研修でグループ討議やプレゼンテーションなどを課されることがあり、私自身も何度か経験してきました。この研修でもグループ討議が中心だったので、課題等の設定や提示の仕方などにおいて、コミュニケーションやロールプレイの要素が随所に取り込まれた内容で、取り組む上でとても楽しかったです。ただ、日常業務では使わない脳をつかっているようで、一日が終わって仕事場に戻ると、かなり疲労感があったのを覚えています。また、グループ討議も回を重ねてどんどん打ち解けてくるとまとまりができて、議論の仕方なども最初のころとはどこか違った感じでした。よう思えました。

研修や講習会などは、そこで身につけたことを日常の業務にだけフィードバックできるか、およびフィードバックしつづけられるか、だと思っていますので、多少なりとも実践していきたいと思っています。

(かねこ なおと)

## 中学生が職場体験

2012.6.19

八雲中学2年生が附属図書館で職場体験学習を行いました。閲覧機の拭き掃除、図書返却の際の作業、さらに図書の修理を経験し「挨拶と声かけが大切と感じた。この仕事に向いている人は辛抱強くてコツコツできる人。」と後日感想を寄せていました。

## 附属図書館の引越作業

2012.5.31～9.18

本館の耐震改修工事のため、所蔵図書をはじめ、建物の中の物を全て搬出して図書館は閉館。そして工事が始まります。この引っ越し作業が主として運送業者の手で、5月31日の貴重資料の搬出から開始されました。7月には連日最高気温が35度を超える猛暑の中、膨大な蔵書や什器類が運び出され、空になった閲覧室は実に広大に感じられました。



この一方で、工事期間中の仮の事務室を大学会館と総合理工学部2号館に設置したり、大学会館2階には仮設閲覧室を整えたりして、工事期間中の業務体制が整備された頃には9月となっていました。最後は9月18日に重さ900kgの金庫が搬出されて3か月半を超える引越作業が終わりました。

## 仮設図書館業務開始

2012.9.10



大学会館2階で仮設図書館の業務を開始しました。18席ほどの閲覧席と約37,000冊の図書、コイン式コピー機それに検索用PC2台で「仮住まい」のサービスを提供。平成25年4月に改修を終えた附属図書館が開館するまでをつなぎます。

## 第2回大学図書館学生協働交流シンポジウム

2012.9.10～9.11

## 第98回全国図書館大会

2012.10.25～10.26

## 全国遺跡資料リポジトリ・シンポジウム

2012.11.15

## 本館

## 書架の仕切板

2012.3

図書館コンシェルジュの活動として、閲覧室の書架に「仕切板」を設置しました。コンシェルジュの学生も職員も、分類表と首っ引きで書架を見て回り、どこに仕切りを挟むか、どんな言葉で表現するのかを検討しました。本を探しやすくなり、また、図書の分野を示す仕切板の色を工夫したので、書架全体が明るい雰囲気になりました。



## 雨の日用ビニールバッグ

2012.3.29



借りた本が雨に濡れないようにとの思いから、利用者用にオリジナルのビニールバッグを作成しました。色は図書館の広報誌“LiMe”にちなんでライム色。デザインは片面はマスクットキャラクターの“みいなちゃん”。

もう片面は、箱からあふれ出る知識や地域との連携をイメージしたデザインになっています。

このバッグについては、5月22日にNHKのテレビ及びラジオで取り上げられました。

## 新年度コンシェルジュ活動開始

2012.5.7

## 新任教員ガイダンス

2012.5.9

## 不用雑誌の無料提供会

2012.5.9～5.10

## 第8回図書館蔵書リユース市

2012.5.30～6.1

## 学生選書ツアー

2012.6.13

図書館に置く本を学生の目線で選んでもらうこの企画、毎年恒例行事となっています。8名の参加者が、店内で実際に本を手にとりながら、読みたい本、他の学生さんに読んでほしい本をじっくり選んでくれました。

## 特設コーナーの開設

2012.9.3~2013.2.28



本館（松江キャンパス）耐震改修工事による、資料梱包移転のため、利用できなくなった図書の一部（200冊程度）を、医学図書館に「特設コーナー」を設け貸出しています。

日頃、医学図書館では接することのできない本にも手を伸ばしてみたいはかがでしょうか？

## 島根県医療関係機関等図書館（室）懇談会総会

2012.10.30

島根県立中央病院を会場に、第21回島根県医療関係機関等図書館（室）懇談会総会が開催され、18機関から21名が参加しました。島根県立中央病院医療局次長 岩成治氏の講演のほか、松江市立病院図書室と医学図書館職員による発表、加盟館同士の情報交換など充実した内容で、盛会のうちに終わりました。

## 報 道

附属図書館本館は、今期は例年に比べ報道に多く取り上げられました。雨天用オリジナルバッグがNHKのニュースに登場したのに始まり、蔵書リユース市、選書ツアーなどサービスに関する取り組みが注目を集めたり、学生協働シンポジウムや遺跡資料リポジトリといった学生を交えての取り組みや学術支援事業も関心を引きました。

報道機関からの情報は生活に欠かせないものですが、報道に接する際に心に留めたいことがあります。報道される内容は必ずしも正確とは限らないこと。そして報道の論調は世論を操作する力を持つことです。報道を受け取る側は見る目、聞く耳を養いたいと思います。

### 新聞

- 7月 5日 選書ツアー（朝日新聞）
- 9月11日 学生協働交流シンポジウム（山陰中央新報）
- 9月14日 遺跡リポジトリ（山陰中央新報）
- 11月16日 全国図書館大会分科会報告（山陰中央新報）
- 11月23日 「島根の国絵図」出版（山陰中央新報）

### テレビ

- 5月22日 雨天用オリジナルバッグ（NHK）
- 5月30日 蔵書リユース市（NHK）
- 6月 1日 蔵書リユース市（マープルTV）
- 6月14日 選書ツアー（マープルTV）

### ラジオ

- 5月22日 雨天用オリジナルバッグ（NHK）

### 文教ニュース（文部科学省所管機関の情報誌）

- 5月14日 雨天用オリジナルバッグ

## 医学図書館

### 文献検索コーナーのパソコン

2012.2

平成23年度予算で文献検索コーナーのパソコン9台のうち、5台を新調しました。OSはWindows7です。動きが軽く、インターネットもスイスイです。

また、これまで使用していたパソコン5台は、松江キャンパス総合情報処理センターを通じて、「東日本大震災 被災中小企業復興支援 再生PC寄贈プロジェクト」へ寄贈しました。

### 病院新任職員へのオリエンテーション

2012.4.3・4.5



4月3日に看護部新規採用者への、4月5日に医科研修医・歯科研修医等へのオリエンテーションを行いました。

図書館サービスの概要を理解し医療業務に活用していただくことを目的に、図書館の基本的な利用法から、文献データベース、電子ジャーナル、文献複写の依頼方法を説明し、皆さん熱心に聴講されました。

### 新入生向け図書館ツアー・ガイダンス

2012.4~5

4月から5月にかけて図書館ツアー（10分ver.）と図書館ガイダンス（30分ver.）を開催しました。新入生向けに図書館の基本的なサービスや利用方法を紹介し、館内のツアーを行いました。

全部で76名の参加者があり、参加された学生さん達は開館時間外特別利用についてや、松江キャンパス本館から図書の取寄せができることなどを興味深く聞いておられました。



### 講座等事務担当者への図書館説明会

2012.5.22~5.23



この説明会は、事務担当者の方に、図書館の各種事務手続きや、図書館サービスの利用方法などを理解してもらう目的で毎年実施しており、今年は2日間で32名の参加がありました。

参加者からは、多様な質問や図書館への要望が出されました。頂いたご意見やご要望は図書館サービスの向上に役立らせていただきます。